

大工さん

理事 松村 秀一

かつては日本に一人だった

今の日本で多くの方が親しみをもって「大工さん」と呼ぶ人たち。全国のどこの建物の工事現場でも見かける職人さんです。けれども、古代の日本では「大工さん」は国に一人だった時期があります。と言いますか、「大工」の歴史は一人から始まったのです。

元々「大工」は古代の官僚組織における建設技術者のトップを指すもので、平安時代中期(10世紀)に編纂された律令の施行細則「延喜式」では、宮廷の建設工事を担う木工寮工部は、統括責任者である大工1名とそれを補佐する次席の少工1名の下に、各工事を担当する木工、土工、瓦工、ろくろ工、桧皮工、石灰工等の技術責任者である長上工13名、専門技術者である番上工数十名、更に彼らの指揮の下で働く駆使丁、飛驒工といった労働者300名ほどで構成されていました。つまり、この時点では大工は国の官僚組織である木工寮にただ一人であり、わかりやすく言えば技術官僚のトップだったのです。気軽に「大工さん」と呼べるような位の人ではなかったのです。



建築史家の故渡辺保忠氏によりますと(「工業化への道」、不二サッシ、1962年)、平安時代の末期(12世紀)、いわば国家事業としての造営の建設費を、国司や貴族が負担するようになり、官僚組織の技術者もそれらの貴族、いわば「私」に雇われる技術者「雇工」に変化していきます。とは言え、この時点で大工のような高級な技術者が働いていたのは、一部の特権階級による建築に限られていました。

それが大きく変化するのは、大規模な築城と城下町の建設が一段落した元和年間(1620年代)を過ぎたあたりからだというのが渡辺先生の説です。それまで一部の支配階級の建築にのみ必要とされていた大工技術とそれを支える職人が、需要の急速な減少に対応すべく職場を拡大し、都市の町屋や比較的富裕な農家の建築に従事するようになったというのです。古代には特別な国家的事業にしか使われていなかった専門技術者による高度な建築技術が、時代とともに適用範囲を拡げ、ついに近世になってすべてのとは言わないまでも、各地の多くの階層が利用できるころにまで普及したことになります。

こうした世界史的には類稀な経緯を辿って、千年以上の間に大工の数もどんどん増えていきました。そして、私が大学を卒業した1980年の国勢調査では、その数は90万人を超えるまでになりました。

よく、他の国々と比べて日本の建築の質は高いと言われますし、私自身もそうだと思いますが、その理由の大きな部分に、千年以上の歴史を持ち高い技能レベルを誇る「大工さん」が全国津々浦々に、こんなに大勢いることがあります。ところが

今、その「大工さん」は急速に高齢化し、減少しています。

驚くべき高齢化と減少の実態

最新の国勢調査（2015年）によりますと、建設・土木作業従事者12種の中で平均年齢が50歳を超える職種が3つあります。豊職、左官と大工です。豊職の平均年齢57.3歳、左官の55.9歳と比べるとやや若いのですが、大工の平均年齢も52.4歳とかなりの高齢です。

実は、今や全国の大工数の合計は35万少々にすぎません。私が大学を卒業した1980年には90万人を超えていた訳ですから、この35年の間に1/3近くにまで減少したことになります。そして、その年齢別の内訳を見てみますと、平均年齢の値の高さ以上に考えさせられる事態が明白になります。

15～19歳の人数が、全国を合計しても2,920名にしかならないのです。同じ5歳刻みで一番多い61～65歳の大工が63,450名、75歳以上の後期高齢者の大工ですら8,230名もいるのですから、10代の大工の少なさは異常です。

仮にこの10代の大工の全員が70歳になるまで大工として働くとして、更に10代で大工になる人数が今後減ることはないかと仮定しても、いずれ全国の大工数が3万人程度にとどまる時代を迎えることになります。仮に建物の造り方が変わらず、その中で大工の役割も変わらないとしますと、私の学生時代の約1/30程度の量の建築工事しかできない時代の到来が予測できるということになります。質の維持も保証の限りではないでしょう。

新しい職人像が求められる時代

その誕生以来、千年以上にわたって日本の建築技術の中核を担ってきた「大工さん」。その急速な減少と高齢化は、産業分野の持続可能性という点から見ても、日本独自の文化の発展的な継承という点から見ても、とても重大な問題です。他の職種にも同様の問題はもちろんあります。例えば、豊職の場合、十代の職人は全国に50名しかいないという危機的な状態です。しかし、すべての建築工事に必要であり、担う工事の種類や範囲も広い「大工さん」の問題が建築関係職人問題の一丁目一番地であることに間違いはありません。

政府でも民間でも、その待遇の改善や育成法について種々議論や取り組みが見られますし、他方でその技能を代替するロボットの技術開発等も着手されています。けれども、確信をもって将来像を描けるほどの決定打はないというのが正直なところでは。

私個人は、これまでの大工さんの職域やライフプラン、更にはその名称に縛られていたのでは、確かな将来像は描けないと思っています。デスクワークと建設現場仕事の行き来、現場仕事と工場勤務の組合せ、建設現場での直接的な施工から検査等を含むマネジメント職への移行等、更には建築とか土木とか旧来の産業の垣根を超えた行き来や組合せ、日本とか中国とか韓国とかタイとかベトナムといった国の境を超えた移行等、多様な将来像の描出が先ずは必要だと思っています。

超高齢社会、人口減少社会の日本ですから、「大工さん」は一例にしか過ぎず、

皆さんそれぞれの分野に同様の問題はあると思います。今後、こうした仕事の将来像に関する分野を超えた経験共有や意見交換はますます大事になると思います。

注) 本稿の一部は既報の拙稿「10代の職人（連載『希望を耕す』第13回）」（松村秀一著、ACe 建設業界、2018年4月号、日本建設業連合会）の一部に加筆修正を施したものです。

東京大学大学院工学系研究科 特任教授